姉王女と弟王子

霜月　雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
姉王女と弟王子

【Ｎコード】
Ｎ０４６４Ｒ

【作者名】
霜月　雪

【あらすじ】
賢く聡明な王子、慈悲深く美しい王女。
そう噂される島国、レアの王子様と王女様。
しかし本当は賢く顔は整っているが短気な王子様と、美人で行動にまったく悪気はないが目的のためなら手段を選ばない王女様だった！
そんな二人の回りには、護衛騎士のはずなのに役に立たない男やら、愛妻家やら、ヒステリー紫やら、いろいろ普通とは言い難い人たちしかいない！
そんな変人に囲まれて育った姉弟の、日常本当にまれに冒険コメデ

イ
！

登場人物紹介

☆登場人物紹介☆
注意：ネタバレ含むので本編を読んでから見てください
話が進むにつれ人が多くなっています。

アルセイト　（アル）

１５歳　男

金髪碧眼の美少年。
レア国の第一王位継承者。賢く聡明と噂される王子様。本当は真面目だが短気だったりする。王から押しつけられた仕事をちゃんと真面目にしている。
アティーに良くちょっかいをかけられる。姉弟仲は良いような悪いような。
母に頭のあがらない父に良く毒舌を披露する。アティーとは年子。

アティエリーナ　（アティー）

１６歳　女

金髪碧眼の美少女。
慈悲深く美しいと噂される王女様。本当は行動に悪気はまったくないが目的のためなら手段を選ばなかったりする。アルに良くちょっ

かいをかけては怒らせて楽しんでいる。護衛であるレオはどうでもいい。
母である王妃とは仲が良い。父のことは遊び道具だと思ってるような気がする。アルとは年子。

ウィクス
２３歳　男
銀髪黒眼。王子専属護衛。実力は確かなもの。
アルとアティーの喧嘩を見て楽しんでる。アルに忠誠を誓っている。
レオとは同期。背は高いほう。真面目。

レオ
２３歳　男
茶髪緑眼。王女専属護衛。護衛に選ばれるだけあって実力はあるのだが、まるでそれが発揮されてない。情けない男。アティーを探すためならどこまでも行く。
アティーに忠誠を誓っている。
ウィクスとは同期。

エイリーン　（紫ババア）

５７歳　女

白髪紫眼。アティーのダンスの教師。もはやかっこ内が正式名称。いつも紫のドレスと、紫のフレームのめがねを身につけ、髪を高くお団子でむすんでいる女性。ダンスの腕はたしか。語尾に「ザマス」とつける特徴がある。ヒステリー。

ヴィンチェンツォ　（ヴィー）

４０歳　男

薄茶髪碧眼。アルとアティーの父親にして現国王。愛妻家。すばらしく呼びにくい名前の持ち主である。その名をつけた彼の父でさえ一発で名を呼べず、母もそうだった。そして世界で一番愛した人、妻にさえ正式な名前を呼んでもらえないある意味悲しい人物。妻に実験の道具に使われている。美形。アルもアティーも大切にしている。妻の頼みならなんだって聞くほどルティーを溺愛してる。

アルベルティーナ　（ルティー）

３７歳　女

金髪灰眼。アルとアティーの母親にして現王妃。夫を実験の道具に使っているが愛は本物。夫の正式な名を未だかまずに呼べない。美人。この親にしてこの子あり。アティーは彼女の血を色濃く継いだといっていいほど良い性格をしている。料理が下手というレベル通

り越して毒物をつくる。というか毒を入れてる。それを夫に食わしている。

ラルフ・ビィル・セルデンナ

１８歳　男

黒に近い藍髪同色眼。レア国と友好の深いセルデンナの王子。歯が光っているかと幻覚を見せるほど爽やかな笑顔を特技にもつ男。アティーに片思い中。さすがにこの年で頬を赤らめて独り言はきついと思うが、それをやってのけた脳内花畑野郎。
初めて名字が出た貴重な人物である。

噂の王子様と王女様

小さい島国ながらも、裕福な国、レア。

その国の王子と王女は、とても有名だ。

王子は賢く聡明で、王女は慈悲深く美しい。

そう、いわれている。

「・・・・おい、今すぐそんな噂流したやつ引っ捕らえろ！」

金髪碧眼の美しい少年は眉間にしわをよせ、こめかみを引きつらせて噂の王子は怒鳴った。

「そういわれましても・・・・」

王子の傍らで、護衛をしている騎士は苦笑する。

「有名ですよ？いままで知らなかったの、王子くらいじゃないですか？」

「最悪だ・・・・・。特に王女の部分が」

王女、という言葉を強調して、噂の賢く聡明な王子こと、アルセイ

トは片手で目を覆った。

「呼んだ？アル」

「・・・・呼んでない、呼んでないからさっさと出てけ」

そんなアルセイト王子の隣に、いつのまにやら顔立ちの整った少女がいた。軽くウェーブのかかった長い金の髪に、大きい碧眼。彼女こそ、噂の慈悲深く美しい王女様である。
アルセイトは実姉である、アティエリーナを睨んだ。
アルセイトことアルとアティエリーナことアティーは年子だ。二人の容貌はそっくりで、身長も同じくらい。例外が、性別と性格とあたりまえだが年齢くらいだろうか。

確かに、容貌は整っている。だから、美しい、というのは間違いではないだろう。
しかし、性格の方に明らか誤解がある。そう叫びたい心境にアルは駆られた。

「なんて顔してんのぉー？すっごくおもしろい顔になってんわよ？あんた」

――――――今目の前で意地悪く笑っている少女を目の当たりにしたら、『慈悲深い』なんて言葉口が裂けても言えんだろうに。

「余計なお世話だ。部屋から出て行け」
「前半と後半の言葉の慣例性がわからないんですけどー？」

ほけほけと笑う少女に、少年は顔を大きく引きつらせた。

「こんのじゃじゃ馬が・・・っ！」

アルは大抵いつも自室にこもっている。
その理由は、書類を始末をしているからだ。父こと国王に「よろしく」と山積みにされた紙の束を見て、アルはため息をついた。

15歳になり、もう成人式をあげ終わったアルには、遊ぶ余裕などなくなった。社交、政治。成人してから、そういったものに追われるように生活していた。

わかってはいたし、気にしていない。

「なあ・・・・、ウィクス・・」
「なんでしょう？王子」

アルはふと手をとめ、窓から外を見つめる。その王子の横顔を、ウィクスこと王子専用護衛騎士は首を傾げてみている。

「平和だな・・・」
アルは安堵したように、すこしその顔を綻ばせる。その言葉に、ウィクスも微笑んだ。
「ええ・・・そうですね」
そう、返事したとたん――――――
「失礼するわよっ！」
――――――その平和は音をたてて崩れた。
「・・・・・扉を蹴って開けるなと何度いったらわかるいい加減海に沈めるぞ頭冷やしてこいっっ！」
「別にいいじゃない、壊れてないんだから」
椅子からたって怒鳴るアル。そんなアルを軽くながして、アティーは扉の無事を確かめる。
「・・・よかった、壊れてなかったわね。ヒールで思いっきり蹴ったんだけど」

「・・・・・・聞こえてんぞクソ女・・・。壊れてないっていった後に確認すんな！」

いつものごとく、朝、第一王子の部屋で怒声が轟いた。

「・・・・うん。これでこそ日常だ」

思わずそう呟いた護衛騎士がいたとかいないとか。

噂の王子様と王女様（後書き）

霜月雪です。

シリアスっけがないコメディ話です。そしてたぶんきっともしかしたら成長物語です。

普通そこまでしないだろう

「・・・で、なんで俺の部屋に来たんだ？」

やつれた顔をして、アルは喜々として自分の服が入っているクローゼットをあさっている姉を一瞥した。ちなみに勝手に人のクローゼットをあさるな、ともう怒鳴った後である。

「あ、あったあった！」

頬を紅潮させ、アティーは振り返る。その手に握られているのは、当然男ものの服。

街の視察用にアルが愛用している、ラフで質素な服だ。

怪訝な顔をしていたアルだが、それでようやく察したらしい。目を細めて、ため息をつく。

「駄目だ」

「まだなにも言ってないわよ！」

アルは鼻を鳴らす。

「あんたが言おうとしていることなんて、すぐわかる。駄目だ。第一男装する理由なんてないだろ？」

「あるわよ！そうしたほうが、まだ楽に酒屋に入れるんだもの！」

「・・・・・・まず酒屋に入ること自体おかしいだろう！気づけ！」

思わずそう怒鳴るアル。アティーはアルの服を握りしめて、呆れたような顔をする。

「情報は酒屋で一番手にはいるのよ。常識でしょう？」

「そんな常識捨ててこい」

こめかみを引きつらせて、アルは低く呟いた。

その時。

「アティー様ぁあぁぁあ！」

廊下から、低い男の声が響いてきた。アルは顔をしかめて、ウィクスは苦笑し、アティーは呆れた顔をしている。

「失礼します！王子っ」

ノックを一回だけし、返事も聞かずに扉をあけたのは、ウィクスと同じ衣服に身を包んだ、王女専用護衛騎士、――――いや、王女の見張り役であるレオだった。男らしい体つきだが、その顔は情けなく眉がハの字になっている。

「やっぱりここでしたか！アティー様！」

「・・チッ・・・見つかったか」

レオの言葉にアティーは舌打ちして、呟く。レオは半泣きの状態で、アティーの側に行く。

「何回いったらその脱走癖直してくれるんですか！？今日は午前からダンスのレッスンが――――――」

「紫ババアの授業なんざ、受けても受けなくても同じよ！私は自由に生きたいの！わかる！？」

「紫ババアって・・・」

紫ババアこと、アルとアティーのダンス教師はその名の通り、いつも紫のドレスに身を包んだ５０後半の女性である。厳しく、語尾にかならず「ざます」をつけるという変な特徴を持っている。

「ていうか私もう完璧に踊れるじゃない！」

「先月のダンスパーティで間違えて男のパート踊ったのあなたでしょう！？」

レオの悲痛な叫びをアティーは眉をよせて訂正する。

「違うわ。間違えたんじゃないもの。わざとよ」

「なにしてるんですか！？わざとって・・」

「だって、ダンスパーティつまらないんだもの。本当はアルに女パート踊ってもらいたかったんだけど」

「誰がやるかっ！」

顔を真っ赤にしてアルは怒鳴る。その様子にアティーは飄々（ひょうひょう）と笑う。

「――――ともかく、お前ら二人さっさと部屋から出て行けっ！」

アルは結局二人を部屋からたたき出した。

「あ、午後から会議はいってたんだった・・・」

アルはふと懐中時計をみて、呟く。

「いくか・・・」

その前に、とアルは机の引き出しから何十もの鍵穴をだした。

そしてそれを部屋の扉につけていく。鍵を全部しめて、意地悪く笑った。

「はっこれであの女も入れまいっ！」

ざまーみやがれ！と高らかに笑い、アルは足取り軽く会議室に向かう。その一歩後ろで、ウィクスは笑いを堪えることで必死だった。

やることが幼稚だ・・・！

アティーは茂みに隠れていた。

「アティー様ぁああ！？どこですかああ！」

半ばヒステリックに叫ぶ自らの騎士の姿に、思わず笑みがこぼれる。

バーカ、ヴァーカッッ！私はここだよっ！いい年した男が泣いてやんの！ダセェェ！ハハハハハッ！

悪人よろしくとばかりに意地の悪い笑みを浮かべて、アティーはカニ歩きでアルの部屋まで気づかれないように行く。扉の前まできて、アティーの目は見開かれる。

か・・・鍵ですって・・・！？

扉に何十にもかけられた鍵。しかもだいぶ凝った造りをしているものだ。

くそ・・・ここまでか・・・

四つんばいになって驚愕の色をその顔に滲ませ、諦めて部屋に帰る――――と思いきや、アティーはためらいなく髪どめをはずす。金の髪が流れ落ちるが、そんなこと気にしない。そして、その髪止めを広げ、鍵穴につっこんだ。

音をたてて、鍵が開いた。

ふぁーはっはっはっはっ！ざまーねえなあ！我が弟よ！私が姉ということを忘れるなよっ！

世の中のどの姉も、まさかここまでして弟の私室には入らないだろう。

アティーはヒールを高らかに鳴らし、部屋にはいってクローゼットをあさり、目的の服を引っ張り出す。

そしてドレスを躊躇なく脱ぎ捨て、その服に腕を通した。

最後に部屋に置き手紙を書いて、アティーはどこから出したかわからない上質な鬘（かつら）をかぶり、窓から外に出た。

「・・・・・・・・・・・・」
会議から帰ってきたアルは、部屋の扉が開いていることにまず驚いた。あわてて部屋に入ると、机の上に手紙と、姉がきていたドレスがなぜか綺麗にたたんで置かれてある。
手紙には、こう記されていた。

愚かな愚弟へ

私に勝とうなんざあ、五百億年はえーよ！バーカ、ヴァーカァァ！
まあ、鍵あけるのに1分かかっちゃったのは誤算だったね！
あ、あとちょっと鍵穴壊しちゃったわ。ごめんあそばせ。
お詫びにこのドレスあげるわ。あんたなら似合うと思うわよ。

親愛なるお姉様より

「いらねえぇぇぇぇぇぇぇぇぇっっ！」

アル本人と護衛騎士以外意味のわからない怒号が、その日、城に響いた。

「アティー様あぁぁ!?どこですかあぁぁぁぁぁ!」

レオは一日中ずっとアティーを探していたりしていた。

広い城内を五週もしたのは、歴史上彼だけである。

普通そこまでしないだろう（後書き）

とりあえずどいてくれ

「――――――――きろ、おきろ！」

朝。何度も揺さぶられるような感覚がした。
しかしこれも、毎朝必ず起こしに来てくれる護衛騎士、ウィクスだと信じて疑わなかったアルは、寝返りを打つ。嫌、うとうとした。
が、それは腹にある重みで遮られる。

おかしい

なぜ腹が圧迫されてるんだ？

アルは重たい瞼をゆっくりとあけた。すると、視界に自分と同じ色彩を宿す瞳が、あった。

「・・・・・・・・・・・・・・」

しばし言葉を失うアル。

彼に上に――――――世間一般で、馬乗りをしている状態にある姉、

アティーは意地悪く笑う。

「なーに黙ってんの？ねえ、びっくりした？驚いたでしょ？」

アティーは強い力で言葉を失う弟の身体を揺さぶる。アルは沈黙していたが、やがて状況整理ができたらしく、眉をつりあげ、低く言った。

「なぜお前が俺の部屋にいるのかはこの際黙っておこう。が、これだけは譲れない。なぜ俺に馬乗りしてんだ！今すぐ降りろ！話はそれから！」

「へいへい」

その時、数回の規則正しいノックが響いた。

「王子？入りますよ」

そして続いて聞こえる男性の声。聞き慣れたウィクスの声だ。

ウィクスは扉をあけ、そして固まった。なにせ第三者から見たらアルとアティーの体勢は想像するだけで恐ろしいものだ。ウィクスは無言で何度か瞬きをし、そして肯いた。

「すみません、王子、王女。自分は大変間の悪い時に――――――」

「ちげーよっっ！恐ろしい誤解すんなぁあああぁぁぁぁぁ！」

後からアルとアティーはこう語る。

『あの時ほど二人の意見が一致したことはない』

――――――と。

「で、なんで部屋にきたんだ？」

昼間何回も無断で部屋に入ることはあっても、朝っぱらからくることはなかった姉だ。

怪訝な顔をして、アルはアティーをみた。アティーは、あきれた、といった顔をして、アルをみる。

「あんた・・・まさか忘れてるわけじゃないでしょうね・・・」

「は？」

「ああー。第一王位継承者がこの低落・・・・。父様はさぞ悲しまれるわ・・・」

「こんな時だけ王女みたいな口調になるな気持ち悪い」

「ひっど・・・。じゃなくて！今日はパーティの日でしょ！」

「そのことか」

ようやく納得したアルに、アティーのため息が重なる。この時ばかりはウィクスはアティーが常識人だと思った。

アルは少し抜けているところがあるのだ。

「・・・でね、私、おもしろいこと思いついたんだけど・・・」

「なんだよ」

「あんたがドレス着て、私が――――――」

「却下」

夜、パーティの開催された。城の広場に数々の豪華な食事が並び、各地の貴族たちが集まっている。
女は煌びやかな、派手なドレスに身を包み、男も派手な色の正装を着込んでいる。

はっきりいうと、上からみると目に痛い。

舞台の上にいるアルは顔を歪めた。女たちがつけている香水のにおいが混じり合って、独特のにおいが充満している。

「――――では、楽しんでくれたまえ」

父である国王の長い前置きが終わり、曲が奏でられる。それと同時に、アルとアティーが舞台に出た。

もちろん、踊りながら。

アルがアティーを優雅にエスコートして、二人は舞台の中央につく。
周りからの感嘆の息を聞きながら、アルとアティーは踊り出した。

見るものを魅了させる容貌を持つ二人は、優しく笑いあいながら、踊っている。

「まあ・・・・さすがは、王子様と王女様ですわね・・・・」

「とても仲のよい姉弟なんですね・・・・」

「お美しい・・・・」

囁きあい、二人をほめる周り。しかし彼女たち、彼たちは真実をしらない。

本当は――――――

「屈辱だ・・・・！この私がエスコートされるなんて！」

「普通女はエスコートされる側なんだよ！」

「いやよ！私は自由に生きたいの！」

「勝手に言ってろ！ていうか手を妙に動かすな、くすぐったい！地味に！」

「はっはっは！今ここでそれを顔に出したらあんたの負けよ！公衆で生き恥をさらしなさい！」

「それが姉の台詞か！」

「愛情の裏返し・・・・」

「嘘つけ！」

これが、本当の二人である。

そういうお年頃

「さあ、レオっ！ささっさとやりなさい！」

「アティー様・・・・、もうこれで１０回目ですよ。そろそろ授業に・・・」

「給料」

「・・・す、すみませんでした・・・」

レア国第一王位継承者アル王子は麗らかな昼下がりに、そんな会話をしている実姉と、実姉の護衛騎士と出くわした。

「・・・・・なにしてるんだ」

その光景はとても奇妙なものだった。姉、アティーはなぜかつま先立ちをしていて、両手をこれでもかと伸ばしている。その両手を護衛騎士、レオが掴み、さらに上へとのばしている、そんな図だ。

「見てわからない？」

「いやわからんだろう」

一呼吸おかずにそう返し、アルはため息を吐いた。眉をハの字にしているレオを一瞥する。

この男、会う度に同じ顔しているな。そのうちその情けない顔がそのまま固定するぞ、憐れな・・・・。

可哀想なものを見る視線をレオに送る。

「お前はなにをしてるんだ？」

アティーに聞いても埒があかないので、レオに聞いてみる。すると途惑いながらも口を開いた。

「・・・アティー様が、『伸びをすると背が伸びるのよ！』と言い出しまして・・・」

「だって私はこれ以上伸びないのよ？あんたは伸びるのに。その身長よこしなさいよ。なんなら足きって私に捧げなさい」

「そんなことできるかボケ。あと言っとくが・・・」

そこでいったん区切り、アルは嘲笑を浮かべた。

「伸びをしても、背は伸びんぞ」

「第一なんで背を伸ばしたいんだ？」

アルのもっともな疑問に、アティーは悔しそうに眉を寄せる。

「そういう年頃なの！」

「お前はいったい何歳だ！」

「私は永遠の５歳っ！」

「そうかそうか。５歳の子供は弟の部屋を鍵穴壊してまで入るほど根性ねじ曲がってないぞ」

「なんのことかしら？」

しらを切る姉に、アルは握り拳をつくる。

「・・・・どうでもいいが、もう廊下のど真ん中であんな異様なことするなよ。恥ずかしい」

「はいはい」

アティーはめんどくさそうにそう返して、そのままどこかへと身を翻した。

「これはなんだ・・・」

朝食時、アルの目の前には、白い液体のはいった瓶が5本。
アルの真正面の席に座り、豪快にその瓶をあおっている姉にそう問いかけると、笑顔が返ってきた。
「牛乳」
「はあ？」
その答えに、アルは眉をおもいきりしかめる。
アティーは噛みしめるようにもう一度いった。
「牛・乳」
「なんで？」
「知らないの？牛乳って飲むと身長が伸びるのよ」
飄々と笑うアティーに、アルはあきれてものがいえない。
「ちなみに私のは6本。あんたのは5本。年齢に10ひいた数よ」
「それはどうもご丁寧に・・・」
アルは顔が引きつるのがわかった。
まったくこの姉は・・・・っ！
「一つ、言っておこう」
「なに？この偉大なるお姉様にお礼？いいわよそんなこと。そのか

わりあんたの服よこしなさい」

「断る」

後半の言葉を切り捨て、アルはため息をはいた。

「牛乳を飲んでも、身長はのびない。牛乳をのんだら・・・」

アルはまたため息をはいた。

こいつ将来禿げるわね・・・

アティーは失礼極まりないことを心中で呟く。

「骨が太くなるだけだ。将来がたいの無駄に良い女にでもなるつもりか？」

「誰ががたいの無駄に良い女よ、こんなか弱い私に向かって！あんた私をだましたわね！」

「誰がいつお前に牛乳を飲むと背が伸びると言ったんだ！第一お前がか弱かったら世界中の人類皆か弱いわっ！」

アルの叫びを黙殺して、アティーは顎に手をあてる。

「くそ・・・じゃあこの牛乳はあとで酒屋のおやっさんの子供にあげるとして・・・」

「いつのまにそんなに友好を深めた！？」

「かくなるうえは・・・」

アティーはアルを一瞥する。

「あんたの足を切るか・・！その足よこしなさい！」

「無理にきまってんだろうがっっ！」

朝からアルの怒鳴り声がまた響いた。

愛妻家

朝。いつもの如く資料に目を通し、印鑑を押すという作業をしていた時に、アルは父である国王に呼び出された。

「なにか用ですか？父上」

表面上は丁寧に。しかしその声は明らかに不機嫌だとわかる低い声音だった。

国王はその声にも動じず、微笑む。

「アルセイト、今日は午後から休んでいいぞ」

「はあ？」

怪訝な顔をして、アルは父を見る。

なにをほざいてるんだ、この親父

心の中でそう毒づき、アルはため息をはいた。

「どういう風の吹き回しですか。父上。仕事は午前中に終われる量じゃありません」

「なら放り出せばいいだろう。大丈夫だ、お前のその実力なら今日の分も明日完璧にまとめてできる」

「できるわけねえだろうが」

にこやかに言ってのける父をアルは睨んだ。

「だいたい、なんでそこまでして午後あけなきゃいけないんだ？」

もはや口調を取り繕うこともせずにアルは問う。国王は浮かべていた笑みをより一層深くする。

「ルティーが、『そういえば、この頃家族でお茶会してないわね』って言い出してね・・」

「あー仕事仕事」

踵を返し、アルは早足で自室へ向かおうとする。

ルティーとは、アルとアティーの母親、王妃である。ルティーとは愛称で、本当はアルベルティーナという。国王の名はヴィンチェンツォという、すばらしく呼びにくい名前である。

王妃であるルティーですら、この名を呼べず、この名をつけた前国王も一発で呼べなかった名だ。

アルはいつしかの母をふと思い出した。

あれは王妃が王を改めて名前で呼ぼうと言い出したときだ。

「ヴィー・・・う〝ぃついてんっっ・・!」

あの時ほど沈黙が痛いと感じた時はなかっただろう。

「なに現実逃避してるんだい？アル」

「げっ！？びっくりしただろうがふざけるなよ」

「ふざけてないんだけど？」

もう少しで部屋に入れたのに、とアルは舌打ちをし、父を睨んだ。会議やパーティの時の威厳なんてみじんも感じさせない飄々とした笑みを、二度と浮かべれないようにその顔を殴りたいと何度おもったことか。

父は母を溺愛している。故に側室はいない。それは良い。良いのだ

が。
ルティーの望みを第一に考え、周りを巻き込むのはやめていただきたい。

「で、アル。今日は午後から家族でお茶会だ」
「俺には仕事があるんだが？」
「はあ・・・本当に俺の息子？脱走もしないし・・・」
「うるせえ」

そっぽを向き、アルは苛立ちげに父を見た。

「でもなんでまたお茶会なんて・・・」
「いいじゃない、おもしろそうだし」

いつのまにか隣にいたアティーに、思わずアルは後ずさる。

「っ・・てめえ、いきなり話にはいってくんじゃねえよ！心臓止める気か！」
「そうよ・・・なんでわかったの？」
「お前本気で止めようとしてたのかっ！？」
「うるさいわねー。これだから短気って厭なのよ」

はあーとわざとらしく大げさにため息を吐く姉に、アルは握り拳をつくる。

「こんのクソ女・・・っ！」
「お父様、午後から、庭でお茶会なんでしょう？」
「ああ、そうだよ」

父はアティーに微笑みかける。

「やったあ！これであの紫ババアの授業受けなくて良くなったわ！喜びなさい、アルっ！」
「なんで俺が喜ばなければならないんだ！？」
「よし、アル、午後には絶対お茶会に出なさいよ？そうしないと城下町に『アルセイト王子って実は女装が趣味なんだぜ』て噂流すわよ」
「なんだその心に深く傷がつく嫌がらせ！」
絶叫するアルの腕をつかみ、アティーは微笑む。
「絶対に、来なさいよ？」

お茶会

午後。
アルとアティーは二人並んで庭に向かっていた。アティーは楽しげに笑みを浮かべているが、アルの顔はまるで視線で人を殺せそうなほど不機嫌さを醸し出している。

「いつまでそのおもしろい顔でいるつもりー？いい加減見飽きたわ」
「誰のせいでこんな顔になってると思ってるんだこの馬鹿女・・・！」

そう言ってアティーを睨む。鋭い眼光をむけられても、アティーは飄々と笑うだけだった。

「あ、もうお母様もお父様も来てるわ」

庭を見ると、国王と王妃が仲睦まじく談笑していた。
国王がこちらに気づき、笑いかける。

「アル、アティー。早くこっちに座りなさい」

王妃もこちらに気づき、微笑む。

「今日のケーキは私が作ったのよ」

王妃のその一言に、席に座ろうとしていたアルの動きが止まる。
アティーはその様子に気づかず、笑った。

「お母様のお菓子、久しぶりねー」

テーブルにのっているケーキをまじまじと見つめ、アティーは笑う。そのケーキはまるで炭の固まりのような色をしていた。アルの顔はみるみる蒼白になっていく。隣にいる国王も同じで、男二人、青い顔を見合わせた。

対する女二人は仲良く話に花を咲かしている。

アルと国王は、二人に聞こえないように身をかがめ、小さい声で会話をしだす。

「おい・・・どういうことだよクソ親父。なんで母上が料理を・・・!?」

「知らん」

「あんたさっきまで母上といただろうが！なんでテーブルの上にある炭に気づかなかったんだ！？」

「炭というな、炭と。れっきとしたケーキだ」

「あれが！？パティシエに謝ってこい！もちろん土下座でなっ！」

思わず怒鳴るアル。

国王は眉を寄せた。

「一国の王が土下座なんかしたら、新聞の見出しそれでいっぱいになるだろうが！」

「危惧するところそこかよっ！」

アルは額に手をあてた。心なしか頭が痛い。

ルティーとアティーはそんな二人に気づいてないのか無視しているのか、談笑を続けている。

ふと、ルティーがこちらを向いた。

「なにしてるの？あなた、アル。さっさと座りなさいな」
微笑をたたえて、ルティーは王と息子に席を勧める。王はすばやくその席に座った。
「すまない・・・ルティー」
「いいえ」
妻の手を握り、あつく謝罪する王に、王妃は慣れた様子だ。アティーはそれを笑いながら、アルはいささか窶れた様子で見ていた。
「ねえ、あなた。これ、私ががんばってつくったの。あなたに一番に食べてほしいわ」
「・・・・これ、か」
ルティーが示しているのは、炭――――のようなケーキだ。
王はそれを一瞥し、ルティーの顔を見つめる。
隣にいるアルは、口を開いた。
「おら、さっさと食えよ。母上の頼みだぞ。そう、まるでエサに群がるピラニアの如く」
「アル・・・お前パパのこと嫌いだろ」
「パパとかいうなキモイ」
吐き捨てるアルに、王はでてもいない涙をぬぐう仕草をした後、ルティーの作った炭のようなケーキを口に運んだ。
　本当に食ったよこの男・・・・
いささかあきれた視線を実の父に送るアル。
アティーとルティーはまるで実験をする科学者のような面持ちで、

王を見ていた。

「ぐ・・っ！」

飲み込んだ瞬間、王の目が見開かれる。喉をおさえ、咳き込む。
そして、そのまま倒れた。鈍い音が響く。

「大丈夫かよ・・・親父ー？」

しゃがみ、父の身体を揺さぶるアル。
ルティーはため息をはいた。

「やっぱり駄目ねえ・・・・。痺れ薬だっていうから入れたのに・・・・全然効果がないわ」
「いや、痺れ以上の効果がでてるよ！倒れたぞ！？」
「確かにそうね。お母様、今度から新米の薬は受け取らない方が・・・」

母と姉の会話に、アルはついていけない。
その時、うめき声と共に王が起きあがった。

「あらあなた。起きたの？」
「ああ・・・」
「お父様、どこか痺れてます？」
「いや・・・、どこも大丈夫だよ」
「・・・ちっ」

小さい舌打ちと共に、王妃とアティーは顔を見合わせた。

「やっぱり、新米のやつは信用できないわね」

「そうね・・・」
「新米じゃなくても信用すんなよ。ていうか薬とか受け取るなよ」
アルの言葉に、王妃は微笑する。
「何言ってるの？アル。これは愛情の裏返しよ？」
「そうよ、なに言ってるの」
「・・・・もう厭だ・・・」
アルは覚束ない足取りで庭から出た。
その後、王子は迎えに来た護衛騎士の前で倒れたという。

ロミオとジュリエット

「嗚呼・・・ジュリエット・・！どうして君はジュリエットなんだい・・っ！？」

昼。

仕事をしていたアルの部屋にいきなり入ってきて、アティーはなぜかそんな言葉を言い出した。

アルは無表情でしばし、アティーを見つめる。

隣で護衛をしていたウィクスは突然の王女の行動に、目を見開いていた。

「・・・・」

アルは一つため息を吐くと、口を開いた。

「それわね、母が私を産み顔を見たときにジュリエットと名付けたからよ」

棒読みでそう言うと、アティーは驚いたようにアルを見た。

しかしそれは一瞬で、次の瞬間には、アティーは胸に手をあて悲しげに目を伏せる。

「そうか・・・じゃあクリスティーヌとその時名付けたら、クリスティーヌだったのかい？」

「そうね。その通りだわ」
棒読みで、アルは適当な言葉を言いつつ仕事を再開する。
「嗚呼！ジュリエット・・！君はどうしてジュリエットなんだい！？」
「結局そこに戻るのかよ！」
思わずそう叫ぶ。
隣でウィクスは背をむけ肩を震わせていた。給料減らしてやろうか。
「・・・・なら聞くけど、どうしてあなたはロミオなの？」
自分がジュリエットなのが納得いかない。
顔をしかめ、アルはアティーにそう聞き返した。
「それはね、私が生まれた時に丁度そこに通りかかったおばあさんが『おお！ロミオっ！久しぶりじゃなあ・・・』と私を抱き上げたからだよ」
「そうだったのか！？」
思わず勢いよく立ち上がるアルに、ウィクスは笑いをかみ殺すことが出来なかった。
「もう質問は終わりかい？ジュリエット・・」
「ええ、あなたから聞くことはもうさっきので終わりよ。さっさと部屋から出てけ」
「・・・言いたかったのは最後だけでしょう王子。というか質問一

回しかしてませんよ・・・」

つい本音を言ってしまうウィクス。
アルは不自然な咳払いをし、さりげなくウィクスの足を踏んだ。
勢いと全体重をかけたので、結構痛かったはずだ。ウィクスは声のない悲鳴をあげた。足をおさえ、蹲る。
それを見てアルはまた不自然な咳払いをした。

「・・・王子・・・酷いです・・・」
「酷いのはどっちだこの野郎」

そう吐き捨て、アルはアティーを一瞥した。

「なにしに来たんだ？」

怪訝な顔をして、アティーに問う。するとアティーはアルの両手を強く掴んだ。

「なにを言うんだい？私と君の仲じゃないか！」
「どんな仲だ気持ち悪い」

青くなって思わず叫ぶアルを黙殺し、アティーは続ける。

「さあ！悩みをすべて打ち明けてくれまえ！はっはっはっ！」
「もはや性格違うじゃねーか！」

もう厭だこんな姉。

「大丈夫だ・・・。どんな君でも私は受け入れられる・・・」
「受け入れんでいいわ！・・・て・・あ・・」

アルは後ろを振り返る。そこには紅茶を持ってきたんであろう侍女がいた。

強く手を握りあい、あつい会話をしている姉弟。

蹲り、悶絶している護衛。

彼女の目にはどう映ったのだろうか。

顔をひきつかせて、侍女はぎこちない仕草で礼をした。

「失礼しました――――――」

「まてまてまてまて――――――――っっ！」

「・・・・で、本当はなんで部屋に来たんだ？」

なんとか侍女を捕まえて誤解をとき、アルは疲れ果てた顔でアティーに聞いた。対するアティーはアルの紅茶を飲みつつ答える。

「暇だったから」

「・・・・たったそれだけの理由で俺は危うく侍女に変な誤解をさせられるとこだったのか？」

額に青筋を浮かべるアル。

アティーは笑いながら言った。

「それはそれでおもしろいかもねえ！」

「消えてしまえクソ姉貴――――！」

紫ババア

「ア・ティー様あああぁぁぁあぁぁ！」

ヒステリックな女の声が朝から響いた。

思わずその場でウィクスは立ち止まり、目を丸くする。

広い廊下を高いヒールで走る老婆がこちらを向いた。高いヒールにドレスの裾を振り乱して走る姿は正直いって恐ろしい。

目にいたい紫のドレス。同じく紫のフレームのめがねをかけ、きつく上で団子結びをした５０代後半の女性――――皆様覚えているだろうか、紫ババアである。

「ウィクス様っ！」

高い声が耳にいたい。ウィクスは口元を引きつらせた。が、すぐに紫ババアに微笑みかける。

「……えーと、むらさ……じゃなかったエイリーン様？こんなところでなにを……」

「アティー様がまたわたくしの授業を抜け出したザマス！」

キーッと紫ババア――――ではなくエイリーンがヒステリックな声をあげた。

「はあ……なるほど」

アティーが逃げ出すのはいつものことなので、ウィクスはただ頷いた。しかし、エイリーン自身がアティーを探すなんて珍しい。いつも可哀想な王女専属護衛であるレオがアティーを探しているのに。

「今日は……エイリーン様自らアティー様をお捜しに？」

「ええ、そうザマス！今日という今日は絶対に授業に出てもらうザマスよ！レオ様だけでは頼りないザマスからね！」

拳を握りしめ熱く誓いをたてるエイリーンに、ウィクスは苦笑を返した。結構失礼なことを言っている。

「……ところで、ウィクス様」

「なんでしょう？」

「ウィクス様はなぜこんなところにいるザマスか？」

「あー……」

王子専属護衛であるウィクスはいつも王子、アルの傍にいなくてはならない。

なのになぜ王子の傍にいないのか、と聞きたいのだろう。

「王子に資料をとってこいと頼まれまして……」

ウィクスは片手に封筒を持っている。これがアルに頼まれた品だ。

「あら、そうなのザマスか」

エイリーンは考えるそぶりをみせ、おもむろに顔を上げた。

「今からアル様の部屋にいくザマスね？わたくしもお邪魔するザマス」

「……どうぞ」

やっぱりか、とウィクスは顔を引きつらせた。

◇　◇　◇　◇

アティーが暇を見つめてはアルのところにいき、脱走を図るのは城では有名だ。

ウィクスは控えめにノックを数回し、扉をあけた。

「失礼します、王子。むらさ……じゃなかったエイリーン様がお見えになりました」

「はあっ！？」

アルと、アルの声と似ているがしかし高い声が重なる。

やはり、とウィクスは苦笑した。

案の定、アルの部屋にはアティーがいた。なぜかベットに横になって本まで読んでいる。完全にリラックスしていた。アルはいつもの如くテーブルにむかい資料の山と戦っている。

いつも真剣なその顔は引きつっていた。視線はウィクスの後ろ――――エイリーンに向けられている。アティーもだ。

「見つけたザマスよ！アティー様っ！」

エイリーンの高いヒステリックな声が部屋、厭、廊下にまで響いた。アティーは舌打ちして飛び起きる。ドレスの裾を翻し、なぜか近くにおいてあった男ものの服を掴んで、窓から飛び降りた。

「あ！こらクソ姉貴っ！」

アルがあわてて手を伸ばすが、服の先がかすっただけで届かない。

「人の服を勝手に持ってくなあああぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！」

アルの叫びが今日も響いた。

「ああ……なんていうことザマス！アティー様が……アティー様が……！」

エイリーンはその場に座りこみ、目を見開く。

「レディがなんて下品な……っ！」

厭、あいつはレディとはお世辞でも言えないし、窓から飛び降りるのははたして下品というのか？

――という台詞を喉までさしかかったがなんとか押さえ、アルは表面上はにこやかに言った。

「久しぶりだな、むらさ……じゃなかったエイリーン。いつもアティーの世話、ご苦労だ。しかし今日は本人がいない。すまないが……」

「お久しぶりザマス。アル様。……ああ、アティー様……どうしてわたくしの授業はいつもボイコットを……」

厭、日常的にいつも脱走はかってるよ

つい、そう口にしそうだ。

「……ウィクス」

「はい」

「むらさ……エイリーンを送れ」

「畏まりました」

一瞬ウィクスの顔が引きつったのは気のせいではないだろう。

アルはこめかみをおさえ、小さくうなった。

「あんのクソ姉貴……っ！」

面倒くさいやつこっちに押しつけやがって！

◇　◇　◇　◇

「嗚呼……どうするザマス！ウィクス様！アティー様が……アティー様が！わたくし、一体どうしたらいいのザマス……？今まで窓から飛び降りるなんてしたこともなかったのに……！わたくし一体どうしたら！」

「とりあえず落ち着いてください！あなたが今しなくてはいけないことは深呼吸と黙ることですっ！」

ウィクスが無事エイリーンを城から出したのはこれから1時間後だった。

◇　◇　◇　◇

「アティー様あああぁぁぁ？どこですか――――！なんで俺洞窟にいるんですかー！」

その頃レオは城内だけでなく、山奥にある洞窟にいた。

なぜこんなところにいるのか、それは本人すら知らない永遠の謎だろう。

買い物と目汁について

「ねえ、アル。私買い物に行きたいの」

真っ昼間っから姉がそんなことを言い出した。

「……行けばいいんじゃないか？」

次の瞬間、アルの腹に拳が食い込んだ。

◇　◇　◇　◇

「ねえねえ、アル。今日暇よね？暇にきまってるわよね？暇ね」

「とても残念なことに暇ではない。わかったらさっさと出て行け」

笑みを浮かべて、アルは扉を指さす。アティーも負けずに微笑んだ。

「暇よね？暇といいなさい」

「暇じゃない」

眉を寄せてアルはそう言うと、アティーに背を向けた。テーブルに柱を築いている資料を見て暇と言える人間はきっとそうそういないだろう。

「アル。私買い物に行きたいの」

「……行けばいいじゃないか」

いつも弟から服を奪い脱走をしているくせに、なにを今更。そう言って呆れるアルの腹に、拳が食い込んだ。

「……くっ……！」

「アル様ー？大丈夫ですか？」

腹を押さえるアルに、ウィクスは声をかける。アルはアティーを睨んだ。

「……大丈夫、だ！……アティー、お前この野郎…！」

後半は姉に向けての言葉だ。アティーは眉を寄せる。

「姉が買い物に行くと言っているのよ。弟も行くに決まってるでしょう？」

「そんな決まりはない！」

「あるわ」

「ない！」

「私がすべてよ」

「唯我独尊野郎め！」

「失礼ねえ……。私は女よ。お・ん・な。野郎なんて、レディに失礼な」

「レディは男装なんてしない」

低レベルな言い争いをしている姉弟に、ウィクスは思わず笑った。そして、ふと思い出す。

「アティー様……。レオは？」

「さあ？どっかそこらへんに落ちてるんじゃない？」

「おち……！？」

顔を引きつらせるウィクスとアル。アティーは平然と口を開いた。

「だって、あまりにもしつこいんだもの。3日で用意した落とし穴に落ちてもらったわ」

嗚呼、清々した。と爽やかに言うアティーに、アルは脱力する。

（可哀想に……）

「アティー様あぁぁぁぁ！」という悲鳴が今にも聞こえそうだ。

「……と、いうことでアル。ついてきなさい」

と、強制的にアルは買い物に行くこととなった。

「……なんで俺が買い物なんかに」

「だって弟なんだもの」

「厭、関係ないだろ！？」

アルの悲痛な声にアティーは微笑む。

「いいから。黙ってついてきなさい？」

「……こんちくしょう！」

本気で男泣きするアルに、アティーは眉を寄せた。

「ちょっと……なに？目汁流さないでよ…汚い」

「お前のその言い方のほうが汚いわ！汁って言うな！汁って！」

「汁は汁よ。目から流れる汁で目汁。なにか問題でも？」

「厭、特に問題は……ってあるわ！その言い方が問題だ！」

「結局最初に戻るじゃない」

「もう目汁だろうが涙だろうがどうでもいいんで、恥ずかしいからお二人とも黙って！」

容貌が容貌のため目立つのに、言い争いで余計目立つ。そんな二人の後ろにいるウィクスも当然人々の注目の中心だ。

ウィクスの言葉にアルは黙ったが、アティーは黙らなかった。

「どうでもいいですって？目汁と涙は全然違うわ！」

「厭、一緒ですって！」

「字数が違うわ！」

「あー確かに……ってそれだけ！？」

ウィクスの叫びに、アティーは目を見開く。

「……そんなことないわよ？」

「その間はなんだ？」

アルの適切なつっこみに、アティーは笑う。

「ふ……。そんな細かいことといちいち気にしてたら人生上手くいかないわ」

「細かいのか？そして１６しか生きてないのに人生語るなよ」

顔を引きつらせるアルを、アティーは華麗に無視する。

「あ。あそこよ。あそこ」
アティーの指さす先は女の子むけの洒落た店だ。
中に入ると、香水に匂いが鼻を掠めた。
「これこれ」
並べられている小物を見つめていたアティーが目的のものを見つけた。
そして手にしてきたのは、髪留めだ。
アルとアティーの瞳と同じ色彩の髪留めだった。
蝶の模様が掘られていて、一番大きい蝶の真ん中に、碧の石が埋め込まれていた。
「買うのか？」
「ええ」
そういうやいなや、アティーはカウンターへ向かう。
会計をすませ、アティーはアルとウィクスの元へすぐ戻ってきた。
「と、いうことで。はい」
「は？」
「優しい優しいお姉様からのプレゼント」
小さい、片手の手のひらで足りるくらいの紙袋。
まさか……とアルは中を開いた。
中には先ほどの髪留めが。

「……ひとつ、聞いていいか？」

「なにかしら？」

わざとらしく、いつもより一つ声のトーンが高い。

「これ、女ものだよな？」

「そうねえ。まあ、似合うからいいじゃない」

「……」

「それともなに？ドレスがほしかった？あらやだ！そうならそうと早く言いなさいよ。優しい優しいお姉様はそれくらいあげるわ」

「……」

「あら？どうして黙ってるの？まさか嬉しすぎて？やだぁ照れるわ。か・わ・い・い弟のためだもの。なんてことないわ。今なら目汁流しても良いわよ」

明らかに可愛いという単語を強調している。

「お前なんて……」

アルは俯いたまま、肩を震わせる。隣にいたウィクスは口元を手で押さえていたが、明らかに肩が笑っていた。

「お前なんて……大嫌いだあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！」

一人の少年の叫びが、響いた。

王子様のとーじょー

小さいながらも栄えている島国、レア。

その島国と、一番近く、そして一番交流の深い国――――――セルデンナ。

その国には、王子が一人おりました。

◇◇◇◇

アルは読書をしていた。

先ほど仕事を終わらせ、ようやく休憩にありつけたのだ。ここ最近は仕事のせいでアルの時間がほとんど奪われていた。

父である国王は倍の仕事をこなしつつ、あんな元気でいられるのか、と思う。

だからといって敬いはしないが。

ようやく手に入れたこの幸せな一時を、アルは満喫していた。しかし、それをぶち壊すのが現実。

「アルセイト様っ！」

慌てたような侍女の声により、その平和はあっけなく終わりを告げた。

「……なんだ？」

本から顔をあげ、アルは侍女を一瞥する。侍女の顔は心なしか蒼かった。

怪訝な顔をするアルに、侍女はようやく口を開く。

「せ、セルデンナの王子が……っ」

瞬間、アルの顔から表情が消えた。

◇◇◇◇

「よぉ！久しぶりだなぁ、アル――――」

「なにしに来たか１０文字で述べろ」

両手を広げて抱きついてくる男を、アルは鋭い眼光で睨んだ。

男は爽やかに笑う。白い歯がキラリと光ったように見えたのは幻覚だろうか。幻覚か、そうか。

「うぜぇ……」

「え！？俺まだなにも言ってない！」

「お前の存在そのものがうぜぇ、不愉快だ」

「存在否定っ」

男は泣き崩れた。まあ演技だが。

「やめろお前が座るとか床が穢れる」
「一国の王子に失礼じゃね！？……まったく酷い言いようだな、マイフレンド！」
「黙れ。誰がマイフレンドだ、脳内花畑野郎が」

そう吐き捨てるアルを気にした様子もなく、男は笑うだけだった。気づいているかもしれないが、この男、セルデンナの王子である。黒に近い藍色の髪に、同じ色彩をもつ、たれ目な瞳。名はラルフ・ビィル・セルデンナという。

「で、本当は何しに来たんだ？」
「暇つぶしー」
「……は？」
「――てのは冗談で。この頃全然こっちに来てないだろ？だから来たんだ」
「なるほど……」

ラルフの言葉にアルは頷き、ソファーに腰を下ろした。その真正面にラルフも座る。丁度そのとき、侍女が紅茶をもってきた。それを喜々として手にとり、ラルフは一口飲む。

「相変わらず、ここの国の紅茶はうまいなぁ！」
「……それはどうも」

ラルフの言葉に、アルは眉を寄せる。いままでこんな風に褒めるなんてなかったのに、と怪しげにラルフを見つめた。

「ところで……アル」
「？なんだ」

急に姿勢を正し、ラルフは真剣な眼差しをアルに向ける。思わずつられて真剣な顔をしたアルに、ラルフは口を開いた。

「アティーは……元気か？」

「……それはもう…」

いっそ病気になってほしいくらいに元気だが
アルの言葉に、ラルフの顔はとたんにゆるむ。

「そうかぁ……元気かぁ…ならよかった…」

「――そういえば、お前……」

ふと、今まで忘れていた重大な事を思い出した。
アルは蒼白になり、立ち上がる。
前に座っている男は気色悪いことに頬を赤らめてなにやら気持ち悪い独り言を呟いているがこの際気にしない。いや、年上の男が頬を赤らめている姿は本当吐き気がするが。

――こいつ、アティーに惚れてるんだった！――

王子様のとーじょー（後書き）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0464r/

姉王女と弟王子

2011年9月29日14時30分発行